

## LAMPIRAN DATA

### Honne

1. 義母：「ねえ、和子さん。あなた、これ着ない。」  
(義母は、紙箱に入ったままの新しいブラウスを見せた)  
和子：「お母さんが・・・？」  
義母：「あなたと私じゃ、センスが違うでしょうけどね・・・」  
和子：「そんなことないわ。高かったでしょう、このブラウス？」  
Hal.11
  
2. みどり：「お父さん・・・」  
日出男：「何だい？」  
みどり：「あんまり隼ちゃんをいじめちゃいやよ」  
日出男：「いじめてなんかいないよ」  
みどり：「お父さん、すぐ目の敵にするんだから、隼ちゃんのこと」  
Hal.18
  
3. 日出男：「やってみなさい、隼人くん」  
隼人：「は・・・」  
日出男：「もう一度」  
隼人：「は・・・」  
日出男：「まったく、図体ばかりでかくて箸も満足に持っていない男を娘の婿にするなんて・・・」  
Hal.21
  
4. 一朗：「どうですか、新居は？」  
隼人：「ええ・・・これで通勤がなかったら、天国だけど・・・」  
一朗：「まったく・・・」  
隼人：「うちの奴なんか、通勤が大変だからもっと近くにするって、さっさと会社やめちゃって・・・女はいいですよ」  
一朗：「だから男は早死にする・・・」  
隼人：「ほんとう・・・」  
Hal.77-78
  
5. 由利：「私は掃除したわよ」  
和子：「だって、ゴミが散らばっていて、小山さんがいま掃除していたのよ。あなた、この間も、掃除忘れたでしょう？」  
由利：「この間は忘れたけど、今日はしたわよ。したわよ、ちゃんと！」

(由利は泣きだしそうな顔で言った。)

Hal.91

6. 和子 : 「私も手伝うわよ」  
(和子も、自分の家の庭から掃除道具を持ってきて、一緒にゴミを掃き寄せた。)  
由利 : 「いいわよ。出かけるんでしょう、和子さん」  
みどり : 「優しいのね、あなたは」  
和子 : 「何が？」  
みどり : 「だって、こんな時、文句を言わないで掃除出来るんだもの。私はダメ。規則を守らない人がいたら、頭に来て、文句を言いに行かずにはられないの」

Hal.91

7. 一朗 : 「でも、和子さんの言い方もね・・・」  
和子 : 「え・・・？」  
一朗 : 「なんでもストレートに言うから・・・前の社宅でもね、私が、よく後で謝りに行ったりしたのよ」

Hal.101-102

8. 洋子 : 「私、何だか分からないけど、佐野さんの奥さんを見てるとしゃくにさわってくるのよね」  
みどり : 「どうして、いい人よ、和子さん・・・」  
洋子 : 「いい奥さんぶって、いいお母さんぶって、猫かぶってるよ、あの人は・・・」  
みどり : 「そんなことないわよ・・・」

Hal.117

9. みどり : 「隼ちゃんも、ときどきこれで帰ってくるんだって・・・いいわねえ」  
隼人 : 「いいわねえって、行きは地獄なんだから・・・ねえ」  
一朗 : 「そうですよ、帰りにこれに乗るのは、たった三百円のさきやかな贅沢ですよ、われわれサラリーマンの」

Hal.120

10. みどり : 「和子さん、真面目だから・・・」  
洋子 : 「あの人はネコかぶってるのよ」  
みどり : 「そんなことないわよ・・・」  
洋子 : 「すました顔して、自分の本性隠してるのよ」

Hal.150

11. 洋子：「私はあなたの味方よ、和子さん・・・でも、ちゃんと答えてくれないと、敵になるかもよ」  
和子：「昔、知ってたんです、あの人を・・・」  
洋子：「昔って」  
和子：「・・・恋人・・・同士だったんです」  
洋子：「へーえ・・・昔の恋人に再会したってわけ・・・よくある話よね、焼けぼっくいに火がついて・・・」  
和子：「火なんかつかないわ!」

Hal.186

12. 洋子：「もう自分たちでやれるでしょ・・・それに、私、働くの夜だから・・・」  
信行：「夜! ?・・・お前、ホステスやろうちゅうのか?」  
洋子：「歌手」  
信行：「カシュ! ?」  
洋子：「私、昔、歌手志望だったこともあるのよ・・・夢よ、もう一度って・・・思いきって今日行って来たの」

Hal.229

13. 信行：「お前、何思っ、そんなことしたの?」  
洋子：「子供たちとね、あなたの面倒見るだけの人生に、私はアキアキしたの」

Hal.230

14. 信行：「男にチャホヤされて・・・」  
洋子：「私ね、まだまだ男がチャホヤしてくれるんだって、それが分かっただけでも楽しいのよ」  
信行：「お前な、四人の子供の母親だぞ」  
洋子：「私はね、十七年間母親をやって来たのよ。だから、たまには、女にもどらせてもらいたいのよ」

Hal.281

15. 和子：「どう?お勤め?」  
洋子：「結構楽しいわよ」  
和子：「そう・・・」  
洋子：「私、あなたに感謝してるのよ。私に決心させてくれたのは、あなただから・・・」  
和子：「感謝されても困るわ、そんなこと・・・」

Hal.293-294

**Tatema**

16. 義母：「あなたと私じゃ、センスが違うでしょうけどね・・・」  
 和子：「そんなことないわ。高かったでしょう、このブラウス？」 Hal.11
17. 義母：「捨てるのももったいないし・・・それに十年近くたったものを、  
 人にあげるのもねえ・・・」  
 和子：「いただきますわ、よろしいのなら・・・」  
 義母：「そう・・・」 Hal.12
18. 日出男：「もう少しゆっくりと食べたらどうなんだ、隼人くん」  
 隼人：「は・・・」  
 日出男：「君、三つも四つもおかずをいっぺんに口に入れるんじゃないよ」  
 隼人：「は・・・」  
 日出男：「ものには味というものがあるんだから、ひとつひとつ味わって食べなさい」  
 隼人：「は・・・」  
 みどり：「お父さんは、年で少し口がうるさくなってるんだから、いちいち気にしないでいいわよ、隼ちゃん」 Hal.20
19. 日出男：「あの家は、私の家を売ったお金で買ったものだ。そうだな、隼人くん？」  
 隼人：「はい、そうです」  
 日出男：「依って来たところは、はっきりとしておかなくては いかん。そうだな、隼人くん？」  
 隼人：「は・・・そうです・・・ぼくは、これでいいです」 Hal.27
20. お母さん：「研究所の女の子にもてるのはいいけど、もしものことがあったら・・・」  
 一朗：「大丈夫よ、お母さん」  
 お母さん：「え・・・」  
 和子：「一朗さんは大丈夫」 Hal.67
21. 隼人：「君からの手紙を、おれはまだ持ってるよ」  
 和子：「やめて、そんな話」  
 隼人：「引っ越すときに全部焼こうと思って・・・何通か残しちゃった・・・」

和子：「やめて・・・」  
隼人：「おれのどこがいやだったんだ」  
和子：「もう忘れて・・・昔のことは・・・」

Hal.112

22. 和子：「みどりさん、子供は？」  
みどり：「ずっと、共稼ぎだったでしょう、だから・・・」  
和子：「じゃ、そろそろ」

Hal.93

23. 弘：「お宅の奥さんだって言ったじゃないですか、西村さん、ぼくが電車の中ではっきり・・・」  
(一朗は、いまさら何を言っているんだという顔をした)  
信行：「しかし、うちの奴は違うっていうから・・・」  
和子：「私の言い方が悪かったんです。お気にさわったのならごめんなさいって、奥さまに言って下さい」

Hal.108

24. みどり：「新婚旅行はどこへいったんですか？」  
和子：「え・・・？」  
一朗：「結婚してすぐ、ぼくがボストンの研究所に出向になったものだから、それが新婚旅行がわり・・・」

Hal.123

25. 信行：「はい、営業です・・・」  
千佳：「私・・・」  
信行：「え・・・？」  
千佳：「私よ」  
(信行が思わず黙り込んでしまった)  
千佳：「声聞いても分からないの？忘れちゃったんでしょ、私の声なんか！」  
(千佳が怒ったように言う)  
信行：「分かってるよ・・・君が、会社へ電話して来るなんて初めてだから驚いたんだよ」

Hal.173

26. 隼人：「おれは、君がすきだから、君が欲しかったんだ。どうして、それが分かってくれなかったんだよ」  
(隼人が和子の腕をつかんだ)  
和子：「ダメよ、隼人さん」  
(和子が、腕を振りほどいて逃げた)

和子：「もう、昔の私たちじゃないのよ・・・たとえ気持ちが分かってても、  
私たちもう、昔にはもどれない・・・」

(和子は、隼人から離れて立った)

Hal.193

27. 洋子 : 「お母さんな、働きに行くちゅうんや」  
信一 : 「え・・・？」  
子供たち : 「しかも、夜や・・・」  
美帆 : 「私たちはどうなるの？」  
洋子 : 「私はね、十何年間、あなたたちとお父さんの面倒を見て来た  
んですからね。今度はあなたたちがお母さんの面倒を見なさい!」

Hal.231

28. 日出男 : 「私はまだ老人倶楽部に入るほど老いぼれてはおらん！」  
みどり : 「おいぼれた人が倶楽部に入るわけじゃないでしょ」  
隼人 : 「悪いですよ、そんなこと言ったら老人倶楽部に入ってる人に、  
ハハハハ・・・」

Hal.233-234

29. 和子 : 「私が・・・？」  
洋子 : 「そう・・・だから、初めてのステージをぜひあなたに見に来て欲しいの。クラブの人に言っとくから。お願い、あなたに見て欲しいのよ、和子さん」  
和子 : 「お友達の歌を聞きにきたの」

Hal.255-256

30. 桃子 : 「あんなきれいな奥さんだもの。よかったに決まってるわよねえ」  
一朗 : 「そうでもないさ」  
桃子 : 「私、課長の家に行って分かったんです」  
一朗 : 「何が？」  
桃子 : 「課長が全然、私に興味示してくれないわけ」  
一朗 : 「・・・」  
桃子 : 「あんな素敵な奥さんがいるんだもの」

Hal.263-264